



**戦隊ヒーロー
完全墮落計画**

ピンク編

目次

●破滅の幕開け【体格差/背面駅弁/公開羞恥】	3
■開宴の合図.....	12

※サンプル版です。

●挿入あり

○挿入なし

※何もついていない章は性描写なしです。

●破滅の幕開け【体格差/背面駅弁/公開羞恥】

ひび割れた壇上を、スポットライトが照らし出す。

背景の奥には、毒々しい紫とピンクの電飾をチカチカと点滅させる大観覧車や、ギギギ……と音を立てて空回りするメリーゴーランドが浮かび上がっていた。

ステージを取り囲むのは、むせ返るような熱気を撒き散らす裸の男たち。

すべてがヒーローのプライドを折るために用意された、ギガ・ネビュラの幹部ヘルの悪趣味な舞台だった。

小規模ステージの観客席を埋め尽くす裸の男たちが、待ってましたとばかりに地鳴りのような雄たけびを上げる。

『さあお待ちかね！本日のメインイベント、セイバーズ・ピンクちゃんのスペシャルヒーローショーの開幕です！』

陽気なナレーションが会場に響きわたる中、スポットライトが捉えたのは、大男に背面駅弁の体勢で担ぎ上げられた春馬の姿だった。

「やめっ……はなっ……せっ、ひ、ぎいッ!？」

変異薬によって後天的に作り替えられた痛々しくも艶めかしい雌の肉体、大男がステージへ向かってどすどすと歩を進めるたび、その巨根が膣奥の最深部を叩く。

ゴチュン、ゴチュンッ!♡ごりゅっ、ごりゅっ!ごりゅっ!♡♡

「あゝッ、あゝひッ、いやあゝッ……あ、が……ッ!」

むせ返るような熱気と視線に晒された春馬は、なんとか逃れようと必死に身じろぎをする。

しかし、その抵抗すらも膣壁を激しく擦り上げる自傷行為でしかなかった。

ぶるぶるっと身体を震わせ、意に反して甘い悲鳴を漏らし続けてしまう。

春馬が着用していた桃色のヒーロースーツは胸元、腹部、そして股間部分がズタズタに破り裂かれていた。

引き裂かれた生地の間隙からは、散々弄ばれて固く勃起上がった二つの乳首と、M字状に担ぎ上げられた股間からは、

蜜孔と後孔が、大勢の男たちの視線の前に晒されるという惨め極まりない格好だった。

そんな春馬の痴態に男たちは沸いた。

うおおおおお！と野太い声をあげながら自らの竿をシコシコと扱き出す。

『ご覧ください！ヒーロー様が、男の腕の中で可愛らしく啼いています！小さなおまんこが男の巨ちんぽによって限界まで広がっています！背面駅弁での豪快なご登場、実に壮観ですねえ！』

実況が春馬の痴態を赤裸々に暴き立てる。

春馬のへそ下の位置には、赤黒く光る淫紋がくっきりと刻まれていた。

ステージの中央へ躍り出た大男は、春馬の股裏をさらに乱暴に担ぎ直すと、深く突き刺さった結合部をそのまま固定し、その場でドスン、ドスンと勢いよくジャンプし始めた。

ステップを踏みながら、体内を攪拌する強烈な縦振動。

ゴッジュ！ゴッジュ！ゴッジュ！ゴッジュ——ツツ！！

「お、おっ、あ、あ、ひいっ、や、いやあ あ ああッ
ッ♡♡」

男の腕の中で、成長期特有の若くしなやかな肢体がバウンドする。

その動き自体が、図らずも男の巨根を自身の膣壁で力強くしごき上げてしまう。

ドスッドスッドスッ、どずううッ！……っ！ごちゅ、ごちゅ、
ごちゅ、ごちゅッッ♡

「んお~~~~~ッ、あっ……、あひいっ♡
あ~~~~♡♡」

ズヂュッ♡と先端が子宮口へ深々とめり込むたび、春馬の視界に火花が散る。

グズウッッ！♡ズッッ……♡ゴッッッジュッッ！♡♡♡

「あ あーッ！♡い、や、あ、あ♡……、とまっ
てええ！と、ま♡っ……んぎいっ！♡」

春馬の尿道口から透明な潮が激しく吹き出し、それと同じタイミングで会場の男たちが欲棒から次々と白い汁をぶち撒けた。

プシャああああああああああ♡♡♡♡

ドビュッツ♡ビュッ♡ビュッー♡ビュルッ♡ドビュッー
ーーー♡♡♡

「うおおおおおおオオオオオオッ！！」

最前線の裸の男たちが、飛び散る潮を口を大きく開けて受け止め、歓喜の雄たけびを上げる。

会場のあちこちからは、耳腔を汚すような悍ましい噴射音が重なり合い鳴り響いていた。

百人もの男たちが吐き出した白濁液が、ステージや観客席の床へバシャバシャと激しく叩きつけられ、立ち上る熱気とともに精液特有のこもった生臭さい汚濁が、会場全体の空気を一瞬で染め上げていく。息をするだけで喉の奥が眩暈を起こしそうなほどだった。

『これはあ！ヒーロー様からのありがたい聖水だぁっ！ご覧ください、客席はまさにザーメン豪雨！会場全体が渾身の濃厚な精臭で充満しています！臭いっ！臭すぎるうっ！おいおい、その最前列の大きなお友達い！ヒーロー様の聖なる潮スープを直飲みするなんて、なんというギルティ！あまりにも贅沢すぎますよお〜ッ！』

実況が狂ったようにマイク越しに囃し立て、男たちの痴態と会場の熱狂を実況し続ける。

むせ返るような精臭と激しい歓声の中、男たちは熱の籠った瞳でステージ上の春馬の痴態を貪るように見つめ続けていた。

『さあ出ましたァッ！仕上げとばかりに豪快に腰を突き上げピンクちゃんを追い込んでいきますッ！』

どちゅうううッッッッ！♡ゴッツジュユッッッッッ♡♡

「ひぎゃあああああつつっ——♡♡♡」

激しい絶頂の瞬間、春馬を犯していた大男はぶるぶると全身を震わせ、野獣のような雄たけびを上げながら春馬の最奥に勢いよく精液を叩き込んだ。

ドビュッッッ、ビュー————♡♡♡

「あゝ、がっ♡あゝ あああああああ♡♡♡」

『キましたああァッ！直撃い！ポルチオへのド直球ストレート種付けだァッ！！ご覧ください、濃厚漢汁に、ヒーロー様のお顔が蕩けきっています！

白目を剥いての大・絶・頂！実に腰に響くいい顔をしていま
すッ！！』

春馬は弓なりに背中を激しく反らせ、子宮口へ注ぎ込まれる灼
熱の快楽に引きずり込まれ、再び強烈な絶頂へと導かれる。

下腹部に浮き出る淫紋が、チカチカと怪しい光を放つ。

宙に抱え上げられた細くしなやかな脚の爪先が、快楽の余韻に
びくびくと痙攣を繰り返す。

大男が春馬の蜜孔から、巨根を鈍い音を立てて引き抜いた。

ずりゅっ♡どろお……♡ひくっ……ひくっ……♡♡♡

「あ……あゝ、ひ、あ……も、やめ……っ」

栓を失った蜜孔からは、夥しいほどの精液が溢れ出す。

濃厚で粘っこい白濁液が、だらしなく開いたままの春馬の孔か
らドロドロと滴り落ち、ステージの上に汚らしい水たまりを
作っていく。

ステージを見上げる裸の男たちは固唾を飲み、欲棒を勃起させながらギラギラと赤く輝く狂気の瞳で、ヒーローの凄惨な痴態を貪るように見つめていた。

『いやぁ素晴らしい！実に素晴らしいデモンストレーションでありましたッ！！非常に力強い背面駆弁おまんこ丸見えファック！血が滾りましたよぉ！ほっかほかにピンクちゃんのおまんこも会場みんなのちんぽもすっかり温まったところで！早速行ってまいりましょう！さあっ！次にピンクちゃんに元気注入してくれるお友達はあるかな！？』

異様なテンションで響き渡る実況ナレーション。その問いかけに、客席の男たちが一斉に手を挙げた。

「はあーいッ！！」「俺に寄越せ！」「ピンクちゃんに元気を注入してやる！」「ブチ犯してやるぜえ！」

会場を揺るがす地鳴りのような野太い声。

大男の腕からステージの床へドサリと崩れ落ちた春馬の視界に映ったのは、ステージへ向かって我先にと押し寄せ、どこまでも続く欲望の長蛇の列だった。

「ひっ……や、嫌だ……くるなぁ……っ！」

溢れ出た精液で汚れた床を、春馬は必死に腕だけで這いずり、後ずさろうとする。

だが、その脚をガシリと掴む、次の男の太い手が伸びてきた。

絶望に歪む視界の先で、下腹部の淫紋が嘲笑うように妖しく明滅する。

ヒーローの尊厳を踏みにじる、終わりのなき輪姦の宴はまだ始まったばかりだった。

■開宴の合図

ダクトを滑り落ちた先は、かつて変電所の心臓部だったであろう巨大な廃機械室だった。

鋼鉄の配管と高圧ケーブルのすき間を埋めるように、ぬらぬらと光る赤黒い肉塊がびっしりとへばりついている。

機械のシリンダーが重い金属音を立てて上下するたび、それに癒着した軟体組織がチュプ、チュプと湿った音を立てて収縮し、管の中を濁った液体が流れていくのが見えた。

足元を踏みしめると、靴底を泥沼のように吸い寄せるねっとりとした感触が伝わってくる。

無機質な工業製品と、悍ましい異星生物の肉体。

二つの異なる素材が無理やり縫い合わされたかのような気味の悪い空間に、春馬は低く舌打ちを漏らした。

「……チッ、悪趣味だな」

壁面を覆う粘液まみれの肉塊が、機械の脈動に合わせて微かに蠢いている。

いつ襲いかかってくるとも限らない。

春馬は腰のホルダーから近接用のセイバー・ブレードを抜き放った。

チャキン、と軽い金属音とともに伸びた鋭利な刀身を、慣れた手つきで低い位置に構える。

吐息を漏らしながら、ブレードの刃先で足元の粘液を牽制するように横目で見やる。

靴底に纏わりつく不快な感触をいなしながら、春馬は腰を低く落とした姿勢のまま慎重に歩を進めた。

天井から滴り落ちる濁った水滴の音と、壁の奥でドクンと脈打つ生体組織の脈動音だけが薄暗い部屋に響く。

一步、また一步と入り組んだ配管の影を抜け、奥へと足を踏み入れていく。

春馬は足を止め、暗闇の奥へと鋭い視線を向けた。

暗闇の奥から漂う本物の気配に視線を向けた。

その奥から、ゆっくりと「それ」は歩み出てきた。

「……なんだ、あいつ」

闇から現れた影の異常さに、春馬は思わず息を呑む。

遠目から見ても長身だと分かるシルエット。

右半身は息を呑むほど緻密で絶世の美女そのものだが、左半身は皮膚が剥ぎ取られたかのように生々しい筋肉組織と半透明の外骨格。

頭頂部から地を這うほど長く伸びた髪は、艶やかな漆黒から足元へ向かうにつれて枯れ木のような灰白色へとグラデーションを描いている。

何より異質なのは、その身を包むラバースーツだった。

濡れた漆黒の膜のような生地は、服というよりは彼女の体に直接へばりついた皮膚そのものだ。

みぞおちまで深くV字に開いた胸元からは、右側の溢れんばかりの豊満な白乳と、左側の血の気の通う赤黒い筋肉が露骨に剥き出しになっている。腰下から伸びるタイトな裾には太ももの付け根まで深いスリットが切り込まれ、歩を進めるたびに、息を呑むほど美しい白い脚と、怪しく脈動する生肉の脚が交互に覗いていた。

言葉を交わすまでもなく、異質の存在だ。

キーーン……

美貌の右唇が微かに開いた瞬間、春馬の耳奥に不快な高周波ノイズが突き刺さった。

言語として意味をなさない音階。直後、女の瞳が怪しく光を帯びた。

（ぐっ……！？）

視界がぐにゃりと歪み、強烈な眩暈と嘔吐感が脳を殴りつける。

（真っ向からやり合って勝てる相手じゃない）

即座に一旦距離を置くことを判断した春馬は、足元の粘液を蹴り飛ばしながら瞬時に踵を返した。

肉体に組み込まれた『A 因子』アセットとしての生体適合が生み出す超人的な脚力が、踏み込んだ足裏から全身へと爆発的な推進力を伝える。常人を遥かに超える跳躍力と反応速度、

そして春馬自身が元々持っていた優れた運動能力とそれを扱えるセンスが合わさり、人間離れした機動力を生み出していく。

頭上をかすめる太い高圧パイプを軽々とくぐり抜け、壁面から突起した鉄骨を足場に踏み切ると、そのまま三メートル以上先の配管へ着地。

入り組んだ障害物の隙間を、パルクールさながらの身軽さで飛び越えながら全速力でその場を離脱する。

しかし、アセットの強化身体をもってしても、背後の圧迫感は一向に弱まらない。

追撃の足音すら立てず、地を這う灰白色の長髪がまるで意思を持つ生物のように蠢き、無音で追尾してくる気配が間近に迫っていた。

背後から、追撃の足音は聞こえない。代わりに、地を這う灰白色の長髪が生物のように蠢き、無音で追いすがってくる気配が迫る。

その時、手元の端末が激しく震えた。画面に踊るのは『AH-04』碧からの通信表示。

「無事だったか……っ！」

死線の中でわずかに安堵し、焦る指先で応答ボタンを押し込む。

『春馬くん！今どこにっ……』

「――っ、来るな！碧、そこから」

叫び切るより速く、迫り集まった超音波と電磁ノイズが端末の基盤を破壊した。ブツンッ、という嫌な切断音とともに画面が漆黒に染まる。

「くそっ……！」

通信が切れた一瞬の隙を逃さず、背後から伸びた灰白色の髪が、触手のように春馬の足首へ強く絡みついた。

「がはっ！？」

勢いよく転倒し、湿った鉄板へと叩きつけられる。

春馬は素早く身を翻し、握りしめていたブレードを振り下ろして足首の髪を力任せに斬り払おうと抗った。

意地で泥臭く抵抗するが、上から覆いかぶさってきた圧倒的な質量と臂力によって、両腕を軽々と床へ押しつけられる。

「っ……離せ……！」

見上げれば、人間離れした巨美女が、舌なめずりし目を細めて春馬を見下ろしていた。

完璧な美貌と不気味な生肉が背中合わせになった顔が、至近距離まで迫る。春馬の耳元に寄せられた美しい唇から漏れたのは、未だノイズにしか聞こえない、けれど狂おしいほど甘い響きを含んだ囁きだった。



幼い頃に父親が死んだ。当時の春馬はまだ三歳程度で、死というものの意味すらよく分かっていなかった。

母親が棺の前で泣いているのを春馬はポカンと見つめていた。

けれど、父親がまだ小さかった頃の春馬を膝の上に乗せて絵本を読んでくれたときのぬくもりは、うっすらと記憶に残っている。

一方で、残された母親は、夫を失った寂しさをいつまでも胸の底にくすぶらせていた。

夫との思い出をどこか自慢げに語るその顔の裏には、取り残された者の脆さと痛々しさがあった。

春馬は子どもなりに気を使っていたし、母親の負担にならないよう我儘も言わず、進んで家事も手伝った。

だが、どれだけ聞き分けの良い息子を演じたところで、母親が抱える孤独や、ぽっかりと空いた穴を埋めてやることはできなかったのだ。

だからこそ、中学生になった頃に母親が連れてきたその男、スーツを着こなし、模範的な大人の佇まいを見せる紳士に、春馬は素直に安堵していた。

男はいつだってスマートだった。

家にやって来るたび、春馬の好きそうな菓子やゲームを手土産に持ってくる。

三人で食卓を囲む時間は穏やかで、母親の弾んだ笑顔を見るのは春馬にとっても胸が温くなるものだった。

「春馬くんは、本当にしっかりしてるね」

男はよくそう言って、春馬の頭を優しく撫でた。

春馬自身もその誠実な人柄には好感を抱いていたし、
母親を幸せにしてくれる存在なら、新しい父親として受け入れてもいいとすら考えていたのだ。

けれど、二人が正式に籍を入れて同居を始めてから、少しずつ違和感が重なり始めた。

男のスキンシップは、日に日に父親の域を超えていった。

風呂上がりにリビングで寛いでいると、わざわざ隣に腰をかけて肩や背中を撫でてくる。

勉強の進捗を聞くフリをして距離を詰め、髪や首筋に触れてくる。指先にこもる不自然な熱と、舐めるような視線だけは誤魔化せていなかった。

気味が悪い、と春馬が距離を置き始めていた矢先のことだ。

その日はあいにくの雨で、母親はパートの遅番で不在だった。

自室でテスト勉強をしていた春馬は、ノックもなくドアが開いた音に顔を上げた。

そこに立っていた義父は、どこか浮ついた、焦点の定まらない目をしていた。

「勝手に入るなよ」

「ご、ごめんね。春馬くん、勉強頑張っているね。……分からないところはあるかな？」

「……いや、大丈夫。集中したいから出て行って」

つっけんどんに断り、視線を参考書に戻す。だが、男は春馬の制止を聞く様子もなく、足音もなく背後に忍び寄っていた。

「だから、出て行けって」

嫌な気配に身を翻そうとした瞬間、強引に肩を掴まれて押し留められた。

そのまま指先が首筋から胸元へと滑り落ち、衣服越しに肌の形を確かめるように撫で回される。

「そうだっ、お父さんが肩マッサージをしてあげようか？」

「っ、触んな！」

明らかに媚びるような猫撫で声と、いやらしい手つきに、春馬は春馬は全身が栗立つのと同時に、激しい吐き気を覚えた。

頭の芯がずっと冷えていくのと同時に、腹の底から湧き上がった拒絶感のまま、自分に触れる男の手を強く振り払う。そのまま勢いよく胸元を思い切り突き飛ばした。

この男が自分にどんな目を向け、何を望んでいるのか、その瞬間にすべてが繋がった。

これまでの親切も、手土産も、母親との結婚すらも。

全部、自分に合法的に近づくための口実に過ぎなかったのだと。

頭の芯がずっと冷えていくのと同時に、腹の底から激しい吐き気が込み上げた。

「春馬くん……？照れることはないんだよ、父さんたちは家族なんだから」

「ふざけんなよ、気持ち悪い。ホモ野郎が」

自分でも驚くほど低い声が出た。気色の悪い笑みを張り付けたまま手を伸ばしてくる義父の手を振り払い、春馬は自分の鞆だけをひったくように掴み取る。

「俺は、女の子が好きなんだよ。あんたのその汚い顔、二度と見せるな」

義父が呆然と立ち尽くす部屋を飛び出し、春馬は玄関を駆け抜けた。

叩きつけるような雨の中、傘もささずに夜の街へ走り出しながら、春馬は心の中で深く毒づく。

(……あーあ。母さんには、絶対言えないな)

ショックを受ける母親の顔が目に見えていた。

だから家にも帰れず、事情を打ち明けることもできず、春馬は顔見知りの年上女性の家へと逃げ込むようになったのだ。

だからこそ防衛組織から打診を受けた際、提示された全寮制、衣食住完全保証という条件を見た春馬は、一切の躊躇もなく契約書にサインをしたのだった。

あの居心地の悪い家から離れ、自分の身を守れる安全な居場所を手に入れるために。



意識が深い闇へと落ちていく

(……くそ、身体が……動かない……)

どれほどの時間が経ったのだろうか。

春馬の意識は泥のような浅い眠りと覚醒の境界線を漂っていた。

目蓋を開けようとしても、脳からの伝達が全身の神経で寸断されているかのようにピクリとも動かない。全身を重い金縛りが支配していた。

まぶたの裏側を、苛烈なまでの白光が刺す。

無機質な手術灯のような眩しい光。視界は白くぼやけている。

「……ギ……ズ、ズッ……——」

頭上から、耳障りなノイズ混じりの「声」が降り注ぐ。

最初はただの不快な音階に聞こえていたそれが、春馬の脳内でじわじわと解凍され、歪な意味を結び始めていく。

言語機能の移植、防衛組織のデータベースにもない未知の言葉が、耳からではなく脳の神経に直接打ち込まれていく感覚。

(何だ……これ……っ)

だが、脳を侵食する異物感など、次に襲いかかってきた熱に比べれば些細なものだった。

熱い。下腹部の奥深く、内臓の隙間に煮えたぎるマグマを直接注ぎ込まれたかのような、強烈な熱感が広がっていく。

「っ……、ひゅ……っ！？」

声を出そうとしても、喉が麻痺して空気の漏れる音しか出ない。

体内で何かが急速に細胞分裂を繰り返している。

骨が歪み、肉が蠢き、雄としての生殖器官が内側から溶かされ、全く別の新たな「器官」へと再構築されていくドロドロとした感触。

まるで自分の身体でありながら、中で未知の生物が芽吹いていくような、狂おしいほどの生理的嫌悪感と快楽の残滓が全身の皮膚を跳ね上がらせた。

下半身を侵すその破壊と創造の最中、温もりのある手が春馬の太ももを愛撫するように撫であげる。

視界の端、ぼやけた白い光の中に、女のシルエットが揺れていた。

「大丈夫よ、……すぐ、私を受け入れられる身体にしてあげる……」

脳に直接響く声は、もはや意味のわかる言葉へと変わっていた。

女の美しい唇が歪み、狂おしいほどの熱を孕んだ瞳で自分を見下ろしている。

下腹部を焼くような熱と、作り変えられていく感覚に激しい戦慄を覚える中、春馬の意識は再び深い闇へと落ちて行った。



「……っは！？」

ハアハアと荒い息を吐き出しながらガバッと上半身を起こす。

冷や汗が全身を濡らしていた。嫌な夢でも見ていたかのように、春馬は即座に起き上がり周囲を見回そうとした。しかし、違和感はすぐに訪れた。

肌に直接伝わる空気の感触。そして何より、下腹部に覚える凄まじい「欠落感」と、相反する見知らぬ熱。

元々春馬が身につけていた高精度のピンクのヒーロースーツは本来ならば外部からの攻撃を弾き、生身の人間では脱がせることすら不可能な防衛隊の最新鋭技術、しかしそれが、無残にも切り裂かれていた。

首元から鎖骨、胸元、下腹部、隠すべき肌の大部分が大胆に露出しており、嫌でも目に入った。そこにあったはずの、男の象徴が、消え去っている。

春馬は恐る恐る股間に手を伸ばす。触れたのは、柔らかな割れ目だった。

「……嘘だろ……っ」

下腹部が女性の体へと作り変えられた現実には、血の気が引いていく。

「……っくそ、なんだよ。これ……！」

屈辱に身を震わせながら、春馬はようやく周囲の情景に目を向けた。

チェック柄の床、鮮やかなビビッドカラーのソファやテーブル。

見覚えがあった。十年前、まだ幼かった頃に母親に一度だけ連れて来られた閉鎖済みの廃遊園地、その敷地内にあるアメリカンダイナーだ。

看板メニューだった巨大なハンバーガーのオブジェが、窓の外で照らされている。

照明は点灯しているが、窓の向こうは濃紺に染まっている。

遠くでは巨大な観覧車が、都会のネオンを模した光を放ちながらゆっくりと回っていた。

『あら、目覚めたかしら？』

ノイズ交じりの声が響き、店内の壁に掛けられたレトロなブラウン管テレビの画面が明かりを帯びる。そこに映し出されていたのは、あの廃機械室で遭遇した女だった。

『目覚めの気分はどうかしら？ふふ、あらあ……その格好、とっても良く似合っているわよお』

（っ……見られているのか?!）

春馬は思わず、破かれたスーツから剥き出しになっている下腹部と股間を覆い隠し、焦るように周囲へ視線を巡らせた。

監視カメラの類は見当たらない。だが、ふとガラス窓の外へ目を向けると、店の看板の端に一羽のカラスが留まっていた。

その両眼が、まるでレンズのように真っ赤な光を宿し、じっとこちらを観察するように首を傾げている。

(……あのカラスの目を通して見ているのか……！)

『よそ見しちゃダメじゃない。せっかく私が直々に自己紹介してあげるっていうのに』

「お前の仕業か……っ！？一体なんのつもりだ、ふざけるのも大概にしろよ！」

胸底からの怒りをぶつけるように叫ぶ春馬に対し、画面の中の女はフッと冷ややかに目を細めた。

『口を噤めクソガキ。お前に拒否権があるとでも思ってるのか？』

先ほどまでの艶めかしいアルトの声が一変し、男のようにドスの利いた低音となって春馬の鼓膜を震わせる。

それと同時に、脳内を直接殴りつけられたかのような激しい超音波の衝撃が駆け抜けた。

「ぐっ……！？……あっ……、っ……っ！」

強烈な頭痛に脳を殴られ、春馬はその場に膝から崩れ落ちると、頭を強く抱え込んだ。

視界が激しく歪む中、画面の中の女は、完璧な美貌の右顔で満足そうに目を細めている。

『私の名前はヘル。近いうちにあんたのご主人様になる女よ』

「っ……は……？」

『でもあんた、私の洗脳をかけるのに、ちょっと手間がかかるみたいなのよね。だから良いことを思いついたの。ただ種付けするだけじゃ、あまりにもつまらないもの』

「主人……？種付け……？一体何を言っているんだ」

『人間が好む“デスゲーム”というものは、なかなか興味深い題材だわ。……ふふ、でも安心しなさい。これは誰も死なない、とっても生ぬるいゲームよ？感謝してほしいくらいだわ』

「ゲームだと……？」

不穏すぎる言葉の数々。切り裂かれたスーツから覗く、無防備な自らの肉体。

そして、女のものへと作り変えられてしまった身体。

理解が追いつかないはずの現実の断片が頭の中で弾け、嫌でも一つの答えへと繋がっていく。

(……まさか俺を……っ)

自分がこれから直面するであろう悍ましい未来を察し、春馬の顔から一気に血の気が引いていく。

ドクドクと不快な早鐘を打つ心臓の音が、耳奥でうるさいほどに跳ね上がった。

『あら、理解が早くて助かるわ』

青ざめる春馬の反応を嘲笑うように、ヘルの指先が画面越しに下を指し示す。

引き寄せられるように自らの腹部へ視線を落とした春馬は、息を呑んだ。

なめらかな下腹部の皮膚の上に、禍々しく発光するハートの『淫紋』が刻まれている。

『その淫紋が完成した時、あなたは私の従順な眷属になるの。……男の精液を吸い尽くさなきゃ生きていけない、淫らな私のしもべにね』

「……なっ……！？」

『ふふ、外を見てごらんなさい』

促されるまま、首を巡らせてガラス窓の外へと目をやる。

ダイナーの前の広場には、ヘルがどこからか集めてきたであろう『男』たちが、全員全裸で折り重なるように倒れていた。ぴくりとも動かず、まるで命のない人形のように静まり返っている。

『私が操る 100 人の人形たちよ。捕まれば……ふふ、どうなるか分かるわね？さあ、私を飽きさせないでちょうだい。……逃げる時間を 5 分あげるわ。感謝しなさい』

「ちょっ……待て……っ！」

『それじゃあ、ゲームスタートよ』

伸ばした春馬の手も虚しく、ブツンッ、とテレビの画面が無機質な音を立てて真っ暗に暗転した。

【続きは製品版をお楽しみください】